

No.2921

地理情報システム (GIS) を用いたフィジー語方言地図の作成とそれに基づくヒトの移動史の解析

人間文化研究機構国立民族学博物館 准教授  
菊澤律子

本研究活動では、フィジー語の方言地図を作成し、フィジー語諸方言の発達経緯を明らかにする方法論の検討を進めた。南太平洋大学(フィジー)とフィジー文化経済社会信託機構所属の言語研究者、およびニュージーランド・マシー大学(本活動開始時は南太平洋大学所属) の GIS 研究の専門家と日本側研究者が共同し、メールで連絡をとって進め、年に1~2度、顔を合わせての研究会を行った。

その成果としては、まず、ArcGIS を用いたフィジー語方言データベース(FJLDB)を完成させたことがあげられる。フィジー語約200方言の各100語のデータが収納されており、非言語情報と連動した分析が可能になっている。FJLDBの制作にあたっては正確性を優先して基礎データの整備に時間をかけ、公開用に整備・加工でき、言語データをさらに追加できる状態に完成させた。現在、研究用、一般公開用、博物館展示用など用途に合わせたインターフェース開発をすすめており、2019年度内にはウェブ版のプロトタイプを開発・公開予定となっている。FJLDBを利用して言語の時間的な変化と空間的な伝播との関係を明らかにするための手法については、FJLDBの開発と並行して理論的な検討をすすめた。インターフェース完成後、実際にデータを操作して検証することになる。

このような成果をより精度および汎用性の高い研究に結び付けるために、本活動を発展させた研究プロジェクト「時空間を融合する: GIS と数理モデルを用いた新たな言語変化へのアプローチ」(科研費(国際共同研究強化(B)、2018.10-2024.3)を発足させた。これまでのメンバーに言語統計学の専門家が加わり、FJLDBを利用して言語変化と非言語情報(地形や地点間の移動距離など)との相関関係を検証し、言語変化をヒトの活動と関連付けて包括的にとらえることを目的とする。また、これら一連の経過報告および成果は、国立民族学博物館(2018年9月20日)および南太平洋大学(2019年3月26日)で国際シンポジウムの形で報告し、現在出版物をとりまとめ中である。